病院図書館　2001；21(2)：53-56

小特集　文献入手のいろは

相互貸借の現状

村上 公子

Ⅰ．はじめに

「利用者の必要とする資料を提供すること。」図書館が誕生してから、現在に至るまで変わることなく続くサービスだと思います。最近では、資料は必ずしも紙を媒体としているわけではないので、むしろ“情報”と言い換えた方がよいのかもしれません。利用者が求める情報を全て自館に収集し、提供することができるのであれば、相互貸借は存在しないでしょう。

今回は、大阪医科大学図書館（以下当館）を含めた大学図書館や、病院図書室で行われている相互貸借について述べたいと思います。

Ⅱ．相互貸借とNACSIS-ILL

相互貸借（Inter Library Loan）は、文字通り資料の図書館間貸借のことで、日本医学図書館協会（以下JMLA）が1927年に設立されたときも事業の核となるものでした[1]。

NACSIS-ILLは周知のとおり、国立情報学研究所（NII）の提供する図書館間相互貸借サービスです。2000年度は、参加機関が833館で、複写依頼件数は、988,457件にも上り、機関数・依頼数共に年々増加傾向にあります[2]。当館は2000年７月より参加しておりますが、全体的に相互貸借業務を、効率よく迅速に行えるようになったと思います。ただ、JMLAや病院図書室間の相互貸借とは異なり、館種をこえた様々な機関から複写依頼が来るため、受付側の負担は増えています。

当館では医学系以外の大学からの依頼が増える傾向にあり、当分この状況は、続くと予想されます。ただし、JMLAの加盟館がシステムに参加していることも多く、NACSIS-ILL経由の受付増が、全体的な受付件数の増加につながるとも限らないように思います。

現在、病院図書室はNACSIS-ILLのシステムに参加できないところが多いようです。これは、「国立情報学研究所目録所在情報サービス利用細則」[3]の定める規定を満たしにくいことによると思われます。また、参加できたとしても、学術雑誌総合目録の作成協力や、病院図書室のネットワーク以外からの文献複写受付などは、マンパワーの乏しい病院図書室にとってかなり負担となるはずです。残念ながら、現行の規則が緩和される方向に動かない限り、小規模な病院図書室の参加は難しいでしょう。

Ⅲ．雑誌の受け入れと資料の廃棄

それでは、現在国内の大学図書館にはどのくらいの種類の雑誌が存在しているのでしょうか。JMLAの1999年度の統計[4]では、カレント受け入れ雑誌の平均は、加盟館１館あたり、1,074種類で、全所蔵種類は、減少傾向にあります（図１）。その理由として、図書館予算における資料費の伸び悩みや削減、雑誌価格（特に洋雑誌）の値上がりが考えられます。

また、保存スペースが手狭になれば、利用の少ない資料が、廃棄の対象になってしまうこともあります。中には、国内に所蔵の少ないもの

むらかみ　きみこ：大阪医科大学図書館
lib012@art.osaka-med.ac.jp

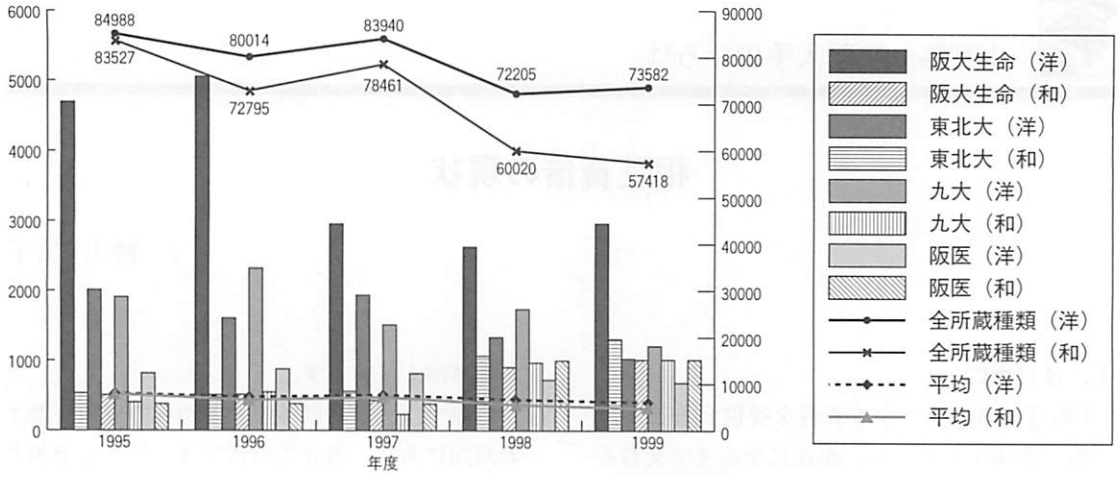
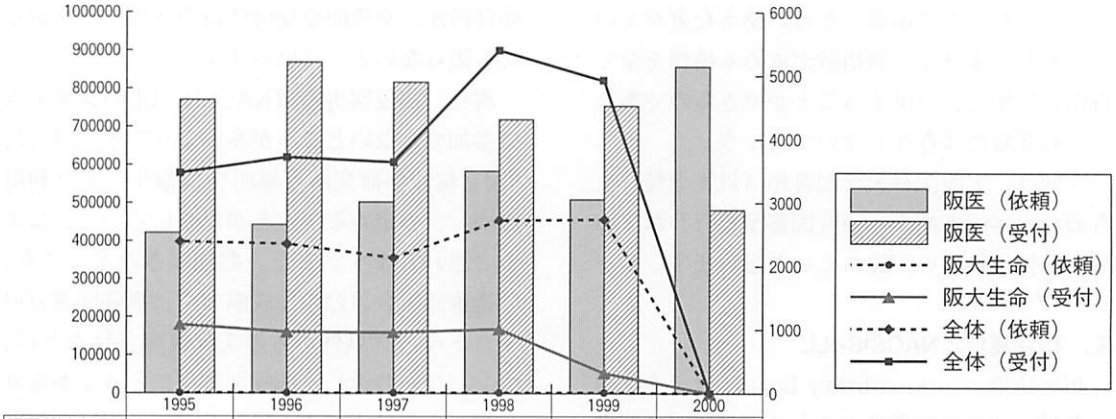


図１．カレント雑誌の種類：JMLA加盟館統計より作図



	1995	1996	1997	1998	1999	2000
阪医（依頼）	2531	2659	3013	3502	3055	5144
阪医（受付）	4622	5211	4898	4312	4526	2890
阪大生命（依頼）	1030	1181	1256	1720	2378	0 ※
阪大生命（受付）	179895	160817	159240	168315	53006	0 ※
全体（依頼）	398093	392407	355240	454349	457036	0 ※
全体（受付）	578725	619665	606870	900012	819795	0 ※

（※は、データなし）

図２．相互貸借の推移：JMLA加盟館統計より作図

が含まれる可能性もあります。当館でも、今年洋雑誌の廃棄を行いました。教室へのアンケートを行うなど、検討を重ねた結果、今回の廃棄で8,300冊の洋雑誌が除籍されました。この中には、英語以外の雑誌も、含まれています。

Ⅳ．相互貸借とセンター館制度

このように、１館だけで収集できる資料の種類はやはり限られています。センター館制度は、特定館が資料の収集を集中的に行うことによって、重複収集をさけ、経済的効率を図る[5]ためにあります。日本の国立大学附属図書館の外国雑誌センター館制度は複数の館によって主題を分散させる方式がとられており、収集の中心となる館はセンター館と、サブセンター館で構成されています。医学・生物学系のセンター館は、大阪大学附属図書館生命科学分館。サブセンター館は、東北大学附属図書館医学分館と、九州大学附属図書館医学分館です。

センター館は、共同利用センターとしての機

能を持つ一方で、所属大学の「附属図書館」としての役割をもっています[6]。豊富な資料を所蔵するため、相互貸借の依頼は低い水準で押さえられていますが、受付件数は飛び抜けて多いのが特徴です（図２）。

しかし、頼みの綱であるセンター館も資料購入点数が減少していると聞きます。特に、1997年版は約1,600誌も購入を中止し、翌年には約500誌を中止したため、購入点数は、最高時の半分近くに減少したそうです[7]。これは、JMLA加盟館１つが、まるまる消えてしまったのと同じくらいの点数です。

V．相互貸借と病院図書室

当館では、職員１名ずつで、相互貸借の依頼、受付に対応しています。他館への文献複写依頼については、減少傾向にあります（図２）。これは、電子ジャーナルの導入と、その利用が浸透してきたことによる影響が大きいと考えられます。また、他館からの文献複写の受付件数も、減少傾向にありましたが、昨年（2000年）は一昨年より、２割程度増加しています。これは当館が、NACSIS-ILLに参加したことによるものと思われますが、今後の様子を見てみないとわかりません。また2000年の病院図書室からの依頼は、受付件数全体の３割程度です。

病院図書室との相互貸借を他館がどう考えているのか知るため、簡単なアンケートを行いましたので、ここではその結果（図３）をもとに、病院図書室との相互貸借について述べたいと思います。

アンケートは、JMLA近畿地区加盟館15館に送信させていただき、回答をいただいたのは当館を含め14館でした。

「病院図書室からの依頼で困っている点」という質問に対する回答の中で、「所蔵事項の確認が不完全である」という項目の選択率が高いのは、大学の附属図書館と違って、調べるためのツールが充実していないからでしょうか。「所蔵館の確認が不完全」、「JMLAと違う形式の申込用紙で送られてくる」、「書誌事項の不備」などは、以前から指摘されている点[8]ですが、依然として比較的高い割合でみられます。また、その他の意見として、「料金の決済方法を簡単にしてもらいたい」、「NIIのNACSIS-ILLシステムによらない相互協力は負担である」、「“相互貸借”とはいうものの、一部の病院図書室においては、依頼と受付のバランスを欠いているように感じる」、「一度に大量の文献複写を申し込んでくる館がまれにある」、「受付先が不明確

Q1. 病院図書室からの依頼の割合（およその件数）

1	25%以下	7
2	25%から半数ぐらい	5
3	70%以上	0
4	お断りしている	1

Q2. 病院へ相互貸借を依頼する割合

1	年数回ほど	6
2	月数回ほど	0
3	週数回ほど	0
4	毎日のように	0
5	依頼したことはない	8

Q3. 病院図書館からの依頼に対してどう思うか

1	加盟館でないので受付ける必要なし	1
2	疑問に感じるが受付けている	3
3	特に何も感じない	2
4	加盟館であろうとなかろうとすすんで受付ける	7
5	その他の意見	2

Q4. 病院図書室からの依頼で、困っていること（複数回答可）

1	書誌事項が不完全	5
2	所蔵事項が不完全	7
3	申込用紙がまちまち	5
4	複写料金の支払いが速やかでない	4
5	その他の意見	3

※JMLA近畿地区加盟館15館へ４月下旬に依頼、うち14館より回答をいただきました。

図３．JMLA近畿地区加盟館へ依頼したアンケートの結果

である」、「病院図書室として担当者がおられないとき困る」、「申込書・通知書の中に受付日・受付番号を入れる欄がない」などが挙げられました。料金の決済方法など、簡単に解決できない問題もありますが、反面次のような基本的マナー[9]を守るということで、ほとんどの問題は改善できると思います。

1．所蔵館の確認は、FAXでの受付をしているかどうかも含めて、事前に必ず行う。
2．書誌事項はできるだけ正確に。論題が不明なときは、「何に関する論文か」等、わかる範囲で詳しく記入する。
3．申込用紙は所定のものを使用する。速達等送付方法は、書誌事項記入欄に表記する。
4．特定館に集中させない。特にセンター館は、申込件数が非常に多いため、複数の館が所蔵している資料の申し込みは避ける。
5．複写料金は、指定された方法で迅速に行う。

Ⅵ．まとめにかえて

相互貸借の受付業務に費やす割合が増えすぎれば、その他のサービスへしわ寄せがいきます。不完全な文献依頼は、受付館の負担となるばかりか、謝絶や、文献の到着が遅れる原因ともなります。双方の業務をスムーズにするには、最低限のマナーを守ることが大切です。

FAXからWebを利用したものへ、冊子体がオンラインジャーナルに変化するなど、図書館をめぐる環境も変わりつつあります。このような流れの中、相互貸借のありかたも、変わらなければならないのかもしれません。しかし、方法が変化しようとも、利用者が希望する情報の入手経路を絶たないようにすることが、お互いに大切です。

参考文献

1）山口直比古：日本医学図書館協会の相互協力活動．情報の科学と技術．1999；49(8)：387
2）国立情報学研究所．参加館・利用館の状況．[引用2001-5-10] http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/INFO/ILL/stat/sanka.html
3）国立情報学研究所．国立情報学研究所目録所在情報サービス利用細則．[引用2001-5-10] http://www.nii.ac.jp/CATILL/INFO/saisoku.html
4）日本医学図書館協会．第71次日本医学図書館協会加盟館統計．東京：日本医学図書館協会；2000. p100
5）日本図書館協会編．図書館ハンドブック第5版．東京：日本図書館協会；1995. p395
6）同上．p396
7）河野富行：外国雑誌購読中止の基準・方法．医学図書館．1998；45(4)：419-420.
8）野原千鶴：病院図書館におけるネットワークとDocument Delivery．医学図書館．1996；43(1)：74
9）日本医学図書館協会相互利用マニュアル改定委員会編：相互利用マニュアル第4版；1996. p18